

語り聞くパイロットファーム

開拓者たちの入植前史



第2回

東北大学大学院情報科学研究科准教授 徳川 直人

「私は三男として生まれました。……将来酪農家になろうと志し、乳牛、牧草等について専心勉強に励みました。その後、軍隊に入隊し戦地に派遣されました……兄2人は皇国の華と散り終戦、私は幸いに無事復員して父の後を継いで畑作農業に従事していましたが、昔、拓殖実習場で勉強し体験した酪農を忘れられず」。

「昭和20年8月、樺太の西海岸の恵須取でソ連軍の爆撃を受けて父は死亡、23年、祖父母と母、兄弟5人で北見管内に引き揚げる」。

「私は、昭和21年9月に満洲からの引揚者。一時、家内の実家に身を寄せ、市役所に勤務したが、食糧事情の関係上、私の実家、東旭川町に引揚げてきました。……土地が狭くそれに傾斜地で、どうても生活できる状態ではなかった」。

「戦災緊急開拓集団帰農者第一陣に参加した両親と……一家7人、戦災の東京を後に渡道……父と共に11年間開拓に従事、5haを開墾、畑作経営にあたったが、第二の開拓の夢を求めて」。

府県で農村や農業の歴史という「定住社会」を想像する人が多い。自給自足の閉鎖的な共同体と

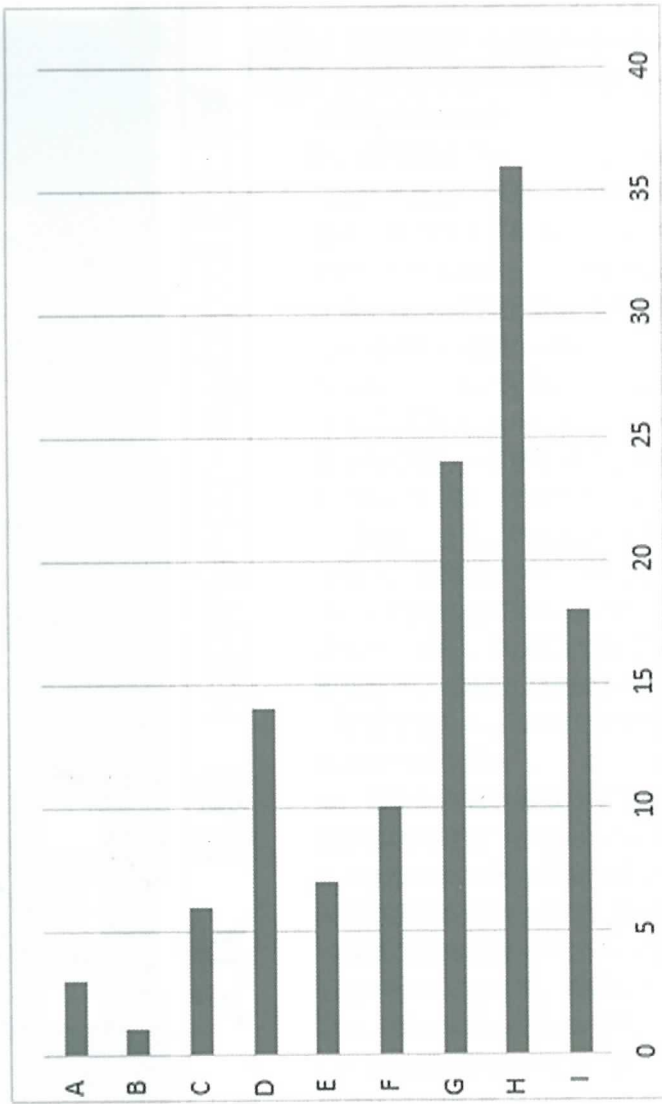
いった固定観念があるのだ。しかし、移民や開拓の歴史を学ぶとそんな日常意識は一変する。定住したのは「家」であって個人ではない。直系制の家が定住するなら、次三男や女子たちが外に出なければならなかった。私の実家（徳島県）も農家だったが、長男である私は周囲から「あととり」と呼ばれ、弟は幼少時から「お前は出て行くのだ」と言い聞かされていた。もちろん、家が生業ごと移動したり、家々が村ぐるみで移動したりする場合もあった。明治以降の日本はそんな移動社会でもあった。

根釧パイロットファームの場合、入植者たちは各地からめいめいに申請を出してやってきた。血縁もなければ地縁もない。大家族あり

図1 入植者（床丹第二地区）の世代構成

年次	1904	1912	1918	1926	1931	1937	1941	1945	1956	1964
出来事	日露戦争	大正	米騒動	昭和	満州事変	日中戦争	太平洋戦争	敗戦	PF入植	東京五輪
世代										
1895~99	9			31	36	42	46	50	61	69
1900~04	4			26	31	37	41	45	56	64
1905~09				21	26	32	36	40	51	59
1910~14				16	21	27	31	35	46	54
1915~19				11	16	22	26	30	41	49
1920~24				6	11	17	21	25	36	44
1925~29				1	6	12	16	20	31	39
1930~34					1	7	11	15	26	34
1935~39						2	6	10	21	29

図2 入植者（床丹第二地区）の世代の人数（単位：人）



代以後の後継者がいた。D世代は境目で、当人が主たる労働力と認められはしたが、まもなくその一代で終わった例もある。

人数別に見ると図2になる。主力はG・H・I世代であることがわかる。G世代は10代後半から20代が戦争の真っただ中。戦死した兄や同級生も多かろう。H世代はこどものころ戦火に追われた世代である。樺太や満洲で生まれた人もある（その人々にとって引き揚げとは故郷喪失であった。彼らの多くは高度成長期を子育てと仕事に忙しい30代から40代で迎えることになる。B・C世代に属する親は、孫とテレビを見て、東京オリンピックや新幹線を隔世の感で迎えたにちがいない。

その体験談に目を通していると、しばしば他の移民・開拓政策が浮かびあがる。古くは屯田兵の家系がかなりある（北海道庁の開拓部に屯田兵村出身者がいた縁もあつて）。ある入植者の家は三代目で家族が14人に達していた。「屯田兵の孫……立地条件が悪いので思案していたところ、農協の有線パイロットファーム入植者募集の話聞き、31年度に入植す

ることにした……すいぶん反対されたが、父母、夫婦、兄弟、子供達14人で新天地開発に人生をかけた」。他にも、満洲や樺太などへの植民、戦争末期の緊急婦農政策、戦後開拓など、他の移民・開拓政策に乗っていた人々が、その政策が敗戦で頓挫したり、入植地に安堵しきれなくなったりして、ここへ再移住してきたという例が見られる。

つまり、パイロットファームは、先行する移民・開拓政策への後からする対策という内実をかなり持っていた。この性格は入植年度が進むにつれて強くなるようだ。初年度入植者の苦難を見て応募者が減り、指導機関が積極的に紹介するようになっていったからである。新しい農業の先導としてのパイロットファームという宣伝がそのなかで強められた。

けれども、H世代やI世代の若い入植者の意欲は、ただそれに誘導されたばかりのものではなく、転換期の熱気を帯びていたように見える。畑作・水田から畜産・酪農へ、小規模から大規模へ、家族的経営から企業的経営へ、人力・畜力から機械力へ。「水田農家に

育ったのであつたが……酪農には興味を持っていた。酪農するなら根室でも絶対にやれる。「広大な土地と地域酪農の畜産基地を確立できるこの地域で企業的に大規模酪農経営、そして世界の酪農に劣らない経営を」。「大型機械化酪農をめざして」。それはまず経営の戦略論ではあるが、世代的体験に裏打ちされて時代の転換を告げるものでもあつた。「世は太平洋戦争の最中なれば、食うに職なく、海軍に身を投じ……灰色の青春となる……自然には裏切りがない。土壌も、動物も、愛すれば必ず報いてくれる」。敗戦後に人々が見出し得た希望と思想の一つだったにちがいない。

今後の日本農業をどうするか。今日も話題になることが多い。しかし、いまそれをどれだけの人が社会作りと自分の生き方の根本問題として受け止めているだろうか。開拓者たちがここにかけた夢は、そのことを訴えているようにも見える。（今回の「引用」は『根釧パイロットファーム開拓史』などの資料から。個人的事情については省略し、表記法は現代風に改めた場合がある）。

小家族あり。引退前から新成人までいる。酪農家出身とは限らず、農家とも限らなかつた。宗教も一つではなく、最初はお祭りさえなかつた。バラバラなのだが、その入植前史は明治から昭和前半までの歴史を総合展示しているかのようである。

床丹第二地区（豊原）分だけが、資料でわかる限り、入植の名義となった人の最高齢は1896（明治29）年、最年少は1939（昭和14）年の生まれ。これを5年きざみに見ると図1のように世代を9つに分けられる。図中の数字は各世代が重要な歴史的事件を何歳で迎えたかを示している（各世代内の最年長者の年齢）。

A・B世代は、人生で最も実り多いはずの時期を長い戦争時代に過ごした。30代で満州事変に巻き込まれ、敗戦時には50歳を迎えようとしており、パイロットファーム入植時（かりに昭和31年として図示）には還暦が近づいている。しかし、入植の年齢条件としては主な労働力がおおむね25歳〜40歳と定められていた（図中で強調したE〜H世代）。だからA・B・C世代の入植者には必ずH・I世